

第2章 柳瀬川流域の現況

1 柳瀬川

柳瀬川は、狭山丘陵に源を発し、東村山市、所沢市、清瀬市を経て、志木市内で新河岸川に合流するまでの約19kmの東京都の一級河川です。この流れは北区内で隅田川に合流し、最後は東京湾に注いでいます。また、市内流域部分の大半が所沢市と接して都県境を流れており、かつて流域には水田や里山が広がり、縄文期の遺跡もあります。

昭和20年代後半から始まった首都圏のスプロール化により流域人口が急激に増えたため、生活排水が増加し、40年代には水質の悪化を招きましたが、50年代半ばから公共下水道の整備が進んだことにより、水質の改善が図られ、アユやオイカワなどの魚影が見られるようになりました。今日では、休日には市内外から多くの人々が訪れ、川遊び、デイキャンプなどを楽しんでいます。



「柳瀬川」
台田団地付近より東を望む



「柳瀬川」
金山橋より桜並木を望む

2 流域の緑

武蔵野台地の北端にあたる柳瀬川流域（石田橋～清柳橋、約4km間）には、崖線の緑（約40,000㎡、うち都市計画緑地19,000㎡）が続いています。幸運にも北向き斜面のため開発を逃れ、良好な状態を維持しており、全国的にも希少な山野草が息づいています。なかでも群生するカタクリは見事で、例年3月の「カタクリまつり」には、市内外から多くの人々がカタクリの観賞に訪れています。この「カタクリまつり」は、市民と市との協働により運営され、多くのボランティアによって支えられています。

崖線南側の平地には、今なお多くの里山が点在しており、清瀬市の緑被率（46.3%）を高水準に保つ要因となっています。里山はむさし野の原風景であり、人と自然が共生してきた証となる文化遺産であり、主にクヌギやコナラを中心とする雑木林です。落ち葉は堆肥として、木々は燃料として先人たちの暮らしに役立ち、いわゆる緑の循環システムが出来上がっていました。このように里山は、人の手が入った自然なりの生態系を維持し、ニリンソウなど可憐な花々を咲かせてきましたが、時代とともに単なる雑木林化するようになり、生態系が変わろうとしていました。そのため、数年前から市民の間で里山復元に向けた運動が始まり、現在、崖線の緑のうち約4,600㎡の市有林で、かつて行われていた萌芽更新が復活し、その結果得られた適度な日差しの恵みにより、可憐な花々が戻ってきました。



「カタクリの花」



「清瀬中里緑地保全地域」

カタクリの群生地



「柳瀬川」
城前橋より桜並木を望む

「台田運動広場」
台田運動広場の桜並木



流域中央部、金山橋～城前橋の河川敷の遊歩道には約 170 本の桜が植わっており、毎年3月下旬を迎えると桜のトンネルが出現します。最近「柳瀬川の桜並木」は、多摩地区有数のお花見スポットとして注目されるようになり、この時期に開催される「桜まつり」は市民はもちろん近隣各地からの花見客で賑わっています。そしてこの遊歩道では、秋を迎えると9万株の彼岸花が色鮮やかに咲き乱れ、赤とんぼを圧倒するほどです。



「台田運動広場」
台田運動広場の彼岸花